

# 小川赤十字病院の災害時救護活動

## ～東日本大震災での救護活動と教訓～

小川赤十字病院の吉田裕副部長。普段は同院で外来診療や内視鏡治療、年間100例近い消化器がん等の手術を行っている。有事の際に被災地に赴く日赤救護班（注1）のメンバーである吉田副部長は、東日本大震災の際に宮城県石巻市で救護活動に当たった。現在はその経験を生かし、同院内で災害救護の教育や訓練に励む。被災地での救護活動の実態やそこから得た教訓について聞いた。



小川赤十字病院外科・消化器科  
吉田裕副部長

### 被災地の救援体制

吉田副部長が被災地に赴いたのは震災後2週間が経った後だった。日赤埼玉支部救護班の第9班として医師1人、看護師3人、事務3人の7人で1つのチームを組み、石巻に向かった。日赤救護班は現地で数日間活動して交代する体制を敷いており、先発班の診療を引き継いだ。発災から半月が経っており「震災の直接

的な被害ではなく、風邪や持病の薬が切れてしまった方の診療が中心でした」と振り返る。現地では吉田副



石巻の避難所で被災者を診療する様子

部長が率いる救護班に加え、成田赤十字病院の救護班、石巻市立病院の医師・看護師ら合わせて25人の混成チームで、石巻市立蛇田中学校の避難所内に設置された救護所を運営した。診療を行っている医療施設が周辺

### 小川赤十字病院

1936年に開院し、内科、外科、整形外科など19の診療科を標榜。県西部地域の中核病院、第二次救急指定病院。訪問看護ステーション、精神科デイケアセンターを併設のほか、糖尿病教育入院や人間ドック・健康診断など地域に根ざした医療を提供。現在、がん、脳血管疾患、心疾患の診療など高度な技術や設備を要する手術室機能の充実を図ると共に、近隣市町村をはじめとし県内の広い地域をカバーする高度、専門的な医療サービスを提供し、二次医療機能を有する中核病院としての医療機能を発揮するため、耐震構造を備えた新病棟への段階的な建替え整備を行っている。（平成28年9月完成予定）



（新病棟完成予想図）

にないため被災者からのニーズも多く、ひっきりなしに患者が訪れ、常に行列ができていたような状況だった。「7人の医師で1日に200人ももの患者さんを診る日もありました」と当時を振り返った。そんな混成チームの中で医師としての経験が長く、臨床経験が豊富な吉田副部長はリーダーとしての役割を担うことになった。「交渉や調整、情報のとりのまとめなど、やらなければならぬことが膨大にありました」と話すように、体系立っていない地域との連携のために奔走し



災害対応について講義する  
吉田副部長

た。認知症によって身元が判明しないお年寄りの身元や診療状況の確認、避難所の保健室1室では手狭になった救護所の拡大など、問題を解決するにはその都度外部機関と交渉や調整が必要になった。「迷っている暇はありませんでした。すべての問題に対し、答えを早く出すことを意識しまし

た」と、目の前の問題をひとつずつ的確に処理していた。

### 指揮・命令系統の重要性

そんな中で痛感したのが「指揮・命令系統の確立」の重要性だ。「様々な問題が起こる中、本来の目的を達成するためには、即断・即決で指示を伝えていくことが不可欠」と力を込める。そうだった現地での経験を

より多くの医療従事者に役立ててもらおうと、昨年から院内で災害対応の研修会を開催している。そこでも素早い指揮・命令系統の確立とトリアージ（注2）の重要性を熱心に伝えている。「その2点が重要になるのは、災害時だけでなく、日常の救急診療などの場面でも同じ」といっている。今後、年3回以上の開催を目標に後進の指導にあたりたい。「人の役に立ちたい、1人でも多くの人の命を助けたらいい」と話す吉田副部長は、赤十字の強みを



小川赤十字病院救護訓練＝小川赤十字病院では年1回救護訓練を行っている

### ◆経歴◆

吉田裕（よしだ・ゆたか）  
1972（昭和47）年生まれ。埼玉出身。1996年埼玉医科大学卒業後、埼玉医科大学病院、武蔵野赤十字病院、埼玉医科大学総合医療センターなどを経て、2006年から小川赤十字病院に。13年から県内日赤救護員指導者を務める。

「みんながなんとかして人を助けたい」という赤十字の人道的な共通認識と仲間意識で団結しているところ」と話す。「その場で向き合った人を何とかしてあげたい」という思いを胸に、どんな状況でも医師として真摯に患者と向き合う。

■注1 日赤救護班：災害発生時に現地に派遣し、被災地の医療機能が回復するまで長期間に亘り被災者を救護する日本赤十字社の医療チーム。赤十字病院の医師、看護師などを中心に、全国で約500班（約7000人）編成している。 ■注2 トリアージ：災害時など多数の傷病者の治療に際し、その重症度、緊急度、優先度などを決定し、最善の救護活動を行うために傷病者の選別を行うこと。